フューチャー・デザイン

北海道大学医師会
北海道大学大学院医学研究院　加藤隆弘（かとうたかひろ）

「フューチャー・デザイン（Future Design）」という言葉をご存じでしょうか。フューチャー・デザインとは、持続可能な社会を創造するための枠組みで、存在しない未来世代を「仮想将来世代」として現代（いま・ここ）に導入し、政治経済や都市計画、環境問題などの分野で新たな社会のあり方を模索する試みです。この概念を提唱した経済学者・西條辰義氏は、木こりの物語を通じてフューチャー・デザインの重要性を説いています。「この木を全て伐採したら億万長者だ！」「この木は不格好だから切ってしまいましょう！」という若者に対し、長老が「そんなことをしたら未来はどうなるのか？」と諭したという話です。

精神科医でありかつ日本では絶滅危惧種の精神分析家である私は、経済学者が提唱したフューチャー・デザインを精神医学や精神医療に応用する試みを始めています。私たちの意思決定は、通常、いまを生きる自分自身や近未来の身近な人々の利益のみを優先しがちです。しかし、このような意思決定では、百年後７世代先の未来を考慮することはほとんどありません。その結果として未来に悲劇が発生し、未来の人々が「なぜそんな決定をしたのか！」と非難するかもしれませんが、私たちはその時点ではすでにこの世にいないのです。戦争という悲劇はこうして繰り返されるのです。

フューチャー・デザインでは、このような悲劇を防ぎ持続可能な未来社会を創出するために、百年後の未来にタイムスリップして未来人としての視点を体験し、その視点を持ったまま現代の社会問題を再考するというワークショップが行われています。百年後の未来社会は、大気汚染や核問題、新たな感染症などにより外出が困難になっている可能性が高いのです。

私は現在、国内に140万人以上いる「ひきこもり」を専門としています。この問題は日本だけでなく世界的にも広がり、2022年には米国精神医学会が発行するDSM-5改訂版に「Hikikomori」が新しい国際病名として収載されました。従来のひきこもり支援は、「ひきこもりは良くないことだから矯正すべき」という思想に基づいていました。しかし、私自身はフューチャー・デザイン体験をしたことで、「百年後には総ひきこもり時代が到来するかもしれない」という未来視点を持つようになり、従来の支援方法とは異なるアプローチを模索しています。つまり、現代では「悪」とされるひきこもりが、未来社会では「ふつう」になる可能性があり、「幸せなひきこもり」的な生活を送る能力こそが未来人に求められるかもしれないのです。時代社会の変遷とともに精神疾患の病名は生まれては消えていますが、百年後には「ひきこもり」という病名は消滅し、「外出病」という新たな病名が生まれているかもしれません。

さて、私は南国鹿児島で生まれ、半世紀を九州で過ごしてきましたが、この４月に縁もゆかりもない北海道に移住し、北海道大学精神医学教室第８代教授に着任して３か月が経ちました。涼しい夏を期待していた私ですが、意外にも蒸し暑い日もあり驚いています。冬の北海道はまだ体験しておりませんが、10年後、20年後には北海道が日本で最も過ごしやすい気候を持つ土地になるのではないかと期待を膨らませています。1928年に内村祐之先生が初代教授として創設した私たちの教室は、もうすぐ百周年を迎えます。百年後の未来の第15代教授から「加藤教授、そんなことをしていては困りますよ」と時にお叱りを受けることをフューチャー・デザイン的に想像しながら、北海道という地域に根ざした精神医学・精神医療の発展のための教室運営に取り組んでゆきます。

北海道医師会の先生方、これからどうぞよろしくお願いいたします。

感染症関連情報

感染症に関する情報につきましては、北海道医師会ホームページ「医師の皆様へ－感染症情報」に掲載しています。

ＵＲＬ：http://www.hokkaido.med.or.jp/doctor/infection.html